（『国語学』180集　1995・3・31）

阪倉篤義博士年譜及び著述目録

糸井通浩編

この年譜及び著述目録は、昭和六十一年十二月出版の『国語語彙史の研究　七』（和泉書院）に所収の略年譜・著述目録、および平成元年作成の履歴書・著書論文一覧を参考に、それに加筆訂正し作成したものである。

年譜に関しては、学歴で、卒業年度と入学年度が同年で継続している場合には卒業年度を、また職歴についても、退職年度と就職年度が継続している場合には、退職年度を省略した。なお、非常勤講師としての勤務（大学院授業担当も含む）については、年譜の末尾に、出講先（機関）及び出講年度とを一括して記した。

著述目録に関しては、これを、(イ)著書（共著を含む）、(ロ)編書（共編書は含むが、監修は除く）、(ハ)論文、の三種に分類し、おのおの出版（発表）年月順に配列した。その際に、学界展望・紹介・対談・座談・随想・月報および教科書・参考書の類は割愛した。

漢字は、萬葉集の「萬」などを除き、原則として新字体を用いた。

資料提供その他のご援助をくださった川端善明氏、蜂矢真郷氏はじめ、関係の方々に記して謝意を表す。

年譜

大正六年五月二十三日　阪倉篤太郎・忠の次男として京都市に生まれる

大正　十三年四月　京都市立錦林第一小学校に入学

昭和　五　年四月　京都府立京都第一中学校に入学

昭和　十　年四月　第三高等学校文科甲類に入学

昭和　十三年四月　京都帝国大学文学部文学科（国語学国文学専攻）に入学

昭和　十六年四月　京都帝国大学大学院に入学、特選給費学生

昭和　十七年三月　京都帝国大学文学部副手（十八年二月迄）

四月　京都女子専門学校講師（専任）（二十年九月迄）

昭和　十八年二月　入隊（中国へ、長沙にて終戦、二十一年六月復員）

昭和二十一年十一月　京都女子専門学校（後、京都女子大学文学部）に復職（専任講師）（二十六年三月迄）

十一月十三日　中村憲吉三女始子と結婚

十二月　第三高等学校講師

京都帝国大学文学部副手（二十二年三月迄）

昭和二十二年三月　第三高等学校教授
昭和二十四年六月　京都大学大学院を退学
　八月　京都大学助教授（吉田分校、三十八年より教養部と改称、に勤務）
昭和二十七年四月　京都大学文学部授業担当を命ぜられる（以後停年退職迄）
昭和三十二年四月　京都大学大学院文学研究科授業担当を命ぜられる（以後、四十七年度を除き停年退職迄）
昭和三十七年三月　文学博士（京都大学）
昭和三十八年二月　京都大学教授
昭和四十一年九月　米国インディアナ大学客員教授として出講（四十二年六月迄）
昭和四十三年五月　学術会議専門委員（同年十二月迄）
昭和四十四年三月　同　右　（四十五年十二月迄）
　四月　京都大学評議員（同八月迄）
昭和四十七年四月　京都大学教養部長・同評議員（四十八年三月迄）
　十一月　国語審議会委員（第十一期以後、五十六年第十四期迄）
昭和五十五年四月　京都大学教養部長・評議員（五十六年三月迄）
昭和五十六年四月　京都大学を停年退職
　京都大学名誉教授
　五月　在中国北京日本語教育センター講師として出講（同七月迄）
昭和五十七年四月　甲南女子大学教授（平成三年三月迄）
　六月　財団法人新村出記念財団理事長（没年迄）
　国立国語研究所評議員（平成六年二月迄）
昭和五十八年九月　在中国北京日本語教育センター講師として出講
昭和五十九年四月　京都日本語教育センター理事
　七月　国文学研究資料館評議員（六十三年六月迄）
昭和　六十年四月　放送大学客員教授（六十二年三月迄）
　六月　国語学会代表理事（六十三年六月迄）
平成　二　年七月　国文学研究資料館評議員（四年七月迄）
平成　三　年十一月　勲三等旭日中綬章を授与
平成　六　年四月　京都日本語教育センター理事長
平成　六　年六月　国語学会名誉会員
平成　六　年十月二十二日　午後八時四十七分、脳動脈瘤破裂、心機能低下により京都市西京区の病院で死亡、満七十七歳
平成　六　年十月　叙位正四品

この間、京都女子大学（昭和二十六～二十九）、大阪大学（昭和二十四、二十六～二十八、三十）、奈良女子大学（昭和二十五、四十三、四十六、四十八、四十九）、京都大学（文学部、昭和二十五）、関西大学（昭和三十）、京都府立医科大学（昭和三十一、三十二、三十四、三十七）、大阪市立大学（昭和三十三、三十九～四十）、立命館大学（昭和三十四～三十六、三十八、三十九、四十三、五十、五十三）、香川大学（昭和三十六）、愛媛大学（昭和四十五）、東京都立大学（昭和四十六）、九州大学（昭和四十八）、新潟大学（昭和四十九）、光華女子大学（昭和四十九）、甲南女子大学（昭和五十、五十三、五十六、平成三～六）、島根大学（昭和五十）、東北大学（昭和五十一）、大阪外国語大学（昭和五十二）、龍谷大

学（昭和五十四）に出講した。

著述目録

・著書（共著を含む）

『箋注倭名類聚抄国語索引』（古典索引叢刊2）（全国書房、昭和十九年一月）

『国語の歴史』（共著）（秋田屋、昭和二十三年十月・改訂版、刀江書院、昭和二十六年六月）

『日本文法の話』（創元社、昭和二十七年四月・後、『改稿日本文法の話』、教育出版、昭和四十九年四月）

『日本文法辞典』（アテネ文庫）（弘文堂、昭和三十二年二月））

『竹取物語・伊勢物語・大和物語』（共著　日本古典文学大系9）（岩波書店、昭和三十二年十月）

『新撰字鏡国語索引』（共著）（京都大学国文学会、昭和三十三年十一月）

『古語小辞典』（専門図書、昭和三十四年十月）

『現代のことば』（共著　三一新書263）（三一書房、昭和三十五年十月）

『夜の寝覚』（日本古典文学大系78）（岩波書店、昭和三十九年十二月）

『語構成の研究』（角川書店、昭和四十一年三月）

『新修古典文法』（共著）（東京書籍、昭和四十四年二月）

『竹取物語』（岩波文庫）（岩波書店、昭和四十五年八月）

『語彙史』（講座国語史3・編集と執筆）（大修館書店、昭和四十六年九月）

『夜の寝覚総索引』（共著）（明治書院、昭和四十九年九月）

『シンポジウム日本語3　語彙・意味』（学生社、昭和五十年五月）

『文章と表現』（角川書店、昭和五十年六月）

『シンポジウム日本語1　日本語の歴史』（学生社、昭和五十年十月）

『国語学概説』（共著）（有精堂出版、昭和五十年十二月）

『日本語の歴史』（共著）（日本語講座6）（大修館書店、昭和五十二年二月）

『なよ竹のかぐや姫』（平凡社名作文庫2）（平凡社、昭和五十二年十二月）

『今昔物語集・本朝世俗部㈠㈡㈢㈣』（共著　新潮日本古典集成）（新潮社、昭和五十三年一月、昭和五十四年八月、昭和五十六年四月、昭和五十九年五月）

『日本語の語源』（講談社現代新書518）（講談社、昭和五十三年九月）

『日本語の基礎』（共著）（旺文社、昭和五十七年八月・後、『改訂日本語の基礎』、日本放送出版協会、昭和六十一年四月）

『日本語表現の流れ』（岩波セミナーブックス45）（岩波書店、平成五年二月）

『家』（シリーズ一語の辞典・三省堂刊行予定。浅見徹が補遺）

・編　書（共編書を含むが、監修は除く）

『国語学辞典』（編集と項目執筆）（東京堂出版、昭和三十年八月）

『阪倉篤太郎『日本文学図会』』（編集と解説執筆）（阪倉先生喜寿記念刊行会、昭和三十二年十一月）

『光厳天皇遺芳』（編集）（常照皇寺、昭和三十九年八月）

『講談社国語辞典』（共編著）（講談社、昭和四十一年十一月・後、第二版、平成三年十一月・後、講談社学術文庫363、昭和五十四年二月）

『諸本集成倭名類聚抄』［索引篇］（執筆と編集）（臨川書店、昭和四十三年九月）

『書陵部蔵青表紙本源氏物語『總角』付注』（新典社、昭和四十五年一月）

『新村出全集』（第三巻・解説）（筑摩書房、昭和四十七年六月）

『日本国語大辞典』（編集）（小学館、昭和四十七年十二月～五十一年三月）
『日本の言語学　文法Ⅰ・文法Ⅱ』（共編書）（大修館書店、昭和五十三年六月、昭和五十四年七月）
『角川古語大辞典㈠㈡㈢㈣』（共編著）（角川書店、昭和五十七年六月、昭和五十九年三月、昭和六十二年九月、平成六年十月、以降続刊予定）
『国語学研究文献総索引』［雑誌編］（編代表）（秀英出版、平成一年三月）
『日本語大辞典』（共編著）（講談社、平成一年十一月）
『史料神陵史――舎密局から三高まで』（共編書）（神陵史資料研究会、平成六年八月）

・論　文

「比喩的枕詞――体言に「の」の添はりたるものについて」（『国語・国文』十巻十二号、昭和十五年十二月）
「接尾語の一考察」（『国語・国文』十五巻十一号、昭和二十一年十二月）
「『やか』『らか』について」（『国語・国文』十七巻一号、昭和二十三年二月）
「むしかめ考」（『国文研究』1、昭和二十三年六月）
「『がてら』遡源」（『国語・国文』十八巻一号、昭和二十四年四月）
「辞書と分類――新撰字鏡について」（『国語・国文』十九巻二号、昭和二十五年十月）
「接尾語ラマの考――書紀の古訓をめぐって」（『国文学』3、昭和二十六年二月）
「日本文法（口語篇）をよんで」（書評）（『語文』2、昭和二十六年三月）
「書紀古訓のふるさ」（『芸林』二巻二号、昭和二十六年四月）
「『片思ひを馬にふつまに』の歌私解」（『萬葉』2、昭和二十七年一月）
「明治以後における古代語法の史的研究」（『国語学』10輯、昭和二十七年九月）
「かけておもふ」（『萬葉』5、昭和二十七年十月）
「『侍り』の性格」（『国語国文』二十一巻十号、昭和二十七年十一月）
「時枝文法の特質」（『解釈と鑑賞』十七巻十二号、昭和二十七年十二月）
「金子武雄氏著『延喜式祝詞講』」（書評）（『国語と国文学』三十巻二号、昭和二十八年二月）
「くだかけ考」（『白銀の楯』21、昭和二十八年三月）
「土佐日記の歌と地の文」（『国語国文』二十二巻五号、昭和二十八年五月）
「歌物語の文章――『なむ』の係り結びをめぐって」（『国語国文』二十二巻六号、昭和二十八年六月）
「佐藤喜代治氏著『国語学概論』」（書評）（『国語学』13・14輯、昭和二十八年十月）
「音韻と語法――仏足石の歌一首」（『解釈と鑑賞』十八巻十二号、昭和二十八年十二月）
「時枝文法と橋本文法」（『中学国語科教育技術』4巻6、昭和二十九年九月）
「『対話』――戯曲のことば」（『国語国文』二十三巻十一号、昭和二十九年十一月）
「萬葉集巻二十訓詁」（『萬葉集大成4（訓詁篇）』平凡社、昭和三十年三月）
「機能文法の諸問題Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（『教育技術中学国語』5巻1・2・3、昭和三十年四月～六月）
「萬葉語彙の一面」（『国語国文』二十四巻五号、昭和三十年五月）
「萬葉集における語詞の構成」（『萬葉集大成6（言語篇）』平凡社、昭和三十年六月）

「平がな用法の歴史（明治以前）」（『言語生活』46、昭和三十年六月）
「『宇多我太毛』割記」（『萬葉』17、昭和三十年十月）
「古代日本語のあゆみ」（『日本語の構造』（講座日本語2）大月書店、昭和三十年十二月）
「文法論の課題」（『国語学』24輯、昭和三十一年四月）
「一つの疑問」（『文学史研究』2、昭和三十一年五月）
「日本語のスタイル」（『ことばの講座1世界のことば・日本のことば』東京創元社、昭和三十一年五月）
「時枝誠記著『国語学原論　続篇』」（書評）（『国語学』25輯、昭和三十一年七月）
「石をたれ見き」（万葉集の新しい訓詁）（『解釈と鑑賞』二十巻十号、昭和三十一年十月）
「『竹取物語』における『文体』の問題」（目次題「『竹取物語』の構成と文章」）（『国語国文』二十五巻十一号、昭和三十一年十一月）
「言語機能」外（項目執筆）（『国語教育辞典』朝倉書店、昭和三十二年一月）
「反語について――ヤとカの違ひなど」（『萬葉』22、昭和三十二年一月）
「金田一春彦著『日本語』」（書評）（京都新聞、昭和三十二年一月）
「文型」外（項目執筆）（『世界大百科事典』平凡社、昭和三十二年）
「話すやうに書くといふこと――言文一致と逍遙・四迷」（『国語国文』二十六巻六号、昭和三十二年六月）
「語構成序説」（『日本文法講座1総論』明治書院、昭和三十二年十一月）
「助動詞はどのように研究されて来たか」（『解釈と鑑賞』二十二巻十一号、昭和三十二年十一月）
「日本語の活用――動詞の活用を中心に」（『講座　現代国語学II ことばの体系』筑摩書房、昭和三十二年十二月）
「『古代歌謡集』読後覚え書」（書評、日本古典文学大系3について）（『萬葉』26、昭和三十三年一月）
「条件表現の変遷」（『国語学』33輯、昭和三十三年六月）
「語順のはなし」（『NHK国語講座』4-3、昭和三十三年六・七月）
「文法――その本質と機能」（『国語教育のための国語講座5文法の理論と教育』朝倉書店、昭和三十三年八月）
「上代の疑問表現から」（『国語国文』二十七巻十一号、昭和三十三年十一月）
「枳園本・易林本節用集」（貴重書講座）（『天理時報』、昭和三十四年二月）
「補助用言」（『解釈と鑑賞』二十四巻三号、昭和三十四年三月）
「あゆひ抄」外（項目執筆）（『名著解題辞典』平凡社、昭和三十四年）
「固有の日本語の造語力」（『言語生活』97、昭和三十四年十月。後、「日本語の造語力」として、『ことばの生活2――ことばで考える』筑摩書房、昭和四十三年十一月に再録）
「物語の文章――会話文による考察」（『人文』6、京大教養部、昭和三十四年十一月）
「地の文と会話文」（『講座解釈と文法1総論』明治書院、昭和三十五年一月）
「萬葉語彙の構造――その一名詞について」（『萬葉』34、昭和三十五年一月）
「佐久間鼎著『日本語の言語理論』」（書評）（『文学論叢16、昭和三十五年三月）
「文法における文の概念」（『国文学』五巻九号、昭和三十五年七月）
「『いと』と『いたく』をめぐって」（『島田教授古稀記念国文学論集』関西大学国文

学会、昭和三十五年三月）
「国語学の新しい資料と研究法」（『解釈と鑑賞』二十五巻六号、昭和三十五年五月）
「竹取物語の解釈と文法上の問題点」（『講座解釈と文法4竹取物語外』明治書院、昭和三十五年五月）
「佐久間鼎著『日本語の言語理論』」（書評）（『国語と国文学』三十七巻六号、昭和三十五年六月）
「文法史について――疑問表現の変遷を一例として」（『国語と国文学』三十七巻十号、昭和三十五年十月）
「岩淵悦太郎著『悪文』」（書評）（京大新聞、昭和三十五年十月）
「言語過程説論争」（『解釈と鑑賞』二十六巻九号、昭和三十六年七月・後『近代文学論争事典』至文堂に収む）
「『しみら』と『すがら』――ヒネモス・ヨモスガラの意味」（『萬葉』41、昭和三十六年十月）
「古代日本語における名詞の構成」（『国語国文』三十巻十一号、昭和三十六年十一月）
「現代国語の造語力」（『国文学』八巻二号、昭和三十八年一月）
「歌の解釈」（『萬葉』46、昭和三十八年一月）
「文法論と文体論のあひだ」（『国語学』52輯、昭和三十八年一月）
「文法と解釈」（『解釈と鑑賞』二十八巻七号、昭和三十八年六月）
「竹岡正夫著『富士谷成章全集上・下』」（書評）（『国語学』54輯、昭和三十八年九月）
「文章の機能と目的」（『講座　現代語5文章と文体』明治書院、昭和三十八年十一月）
「平城京出土の新しい国語資料等」（分担執筆）（『日本語の歴史3』平凡社、昭和三十九年一月）
「『夜の寝覚』の文章」（『国語と国文学』四十一巻十号、昭和三十九年十月）
「『よるの寝覚』と『よはの寝覚』」（『国語国文』三十三巻十号、昭和三十九年十月）
「福田良輔著『古代語文ノート』」（書評）（『国語学』60輯、昭和四十年三月）
「外国語としての日本語の問題点」（『日本語教育』6、昭和四十年三月）
「文節」（『口語文法講座2各論研究編』明治書院、昭和四十年四月）
「接尾語の位置」（『国語国文』三十五巻五号、昭和四十一年五月）
「仮名表記と韻律との関係」（『沢瀉博士喜寿記念萬葉学論叢』、昭和四十一年七月）
「新撰字鏡の再検討――享和本を中心に」（『本邦辞書史論叢』三省堂、昭和四十二年二月）
「新撰字鏡解題」（『新撰字鏡（増訂版）』全国書房。後、臨川書店、昭和四十二年十二月）
「アメリカでの経験から」（『人文』14、京大教養部、昭和四十三年一月。後、『日本語教育』12、同十月に転載）
「しめった土地とかわいた土地」（『表現研究』7、昭和四十三年二月）
「固有名詞」（『国語学』72輯、昭和四十三年三月）
「『話しあい』の論理」（朝日新聞、昭和四十三年九月）
「語義記述の現実と理想」（『言語研究』54、昭和四十四年一月）
「文法の理解を」（文法の指導）（『国語展望』21、昭和四十四年二月）
「国語史資料としての木簡――藤原平城両宮跡出土の木簡について」（『国語学』76輯、昭和四十四年三月）

「中古語法の特質と解釈上の問題点」（『国文学』十四巻七号、昭和四十四年五月）
「『べし』『らし』『らむ』『けむ』について」（『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』表現社、昭和四十四年六月）
「近畿圏における方言意識の調査」（共著）（京大近畿圏総合研究会編『近畿圏その人文・社会科学的研究』、昭和四十四年七月）
「鈴木朖『言語四種論』」（月刊『文法』一巻十一号、昭和四十四年八月）
「『水かけ論』の語源」（朝日新聞、昭和四十四年九月）
「日本語の歴史・中古」（『解釈と鑑賞』三十四巻十四号、昭和四十四年十二月）
「馬淵和夫著『上代のことば』」（書評）（『国語学』80輯、昭和四十五年三月）
「築島裕著『古代日本語発掘』」（書評）（『今週の日本』、昭和四十五年五月）
「王朝の文化（かなと倭絵）」（『京都の歴史1平安の新京』学芸書林、昭和四十五年十月）
「『開いた表現』から『閉じた表現』へ――国語史のありかた試論」（『国語と国文学』四十七巻十号、昭和四十五年十月）
「語の規範」（『講座正しい日本語4語彙編』明治書院、昭和四十五年十一月）
「ことばの教育」（『教室の窓中学国語』131、昭和四十五年十一月）
「春日和男著『存在詞に関する研究』」（書評）（『国語学』83輯、昭和四十五年十二月）
「語り物の歴史と浄瑠璃の成立」（『日本の古典芸能7浄瑠璃語りと操り』平凡社、昭和四十五年十二月）
「木簡の語る世界」（『言語生活』243、昭和四十六年十二月）
「意味のまとまり」（『武智雅一先生退官記念国語国文学論集』、昭和四十七年二月）
「『入る』の意義――動詞の意味の説明のむずかしさ」（『国語展望』30、昭和四十七年三月）
「国語学」（項目執筆）（『ブリタニカ』TBSブリタニカ、昭和四十七年五月）
「日本人の感情と言語」（『言語』一巻二号、昭和四十七年五月）
「亀井孝著『日本語学のために』」（書評）（『国語と国文学』四十九巻五号、昭和四十七年五月）
「日本語の性質」（『国語展望』臨時増刊号、昭和四十七年十一月）
「日本文法における品詞」（『品詞別日本文法講座1品詞総論』明治書院、昭和四十八年一月）
「語源の解釈」（ことばのまど10・日本国語大辞典刊行会、昭和四十九年七月）
「『あらたし』から『あたらし』へ」（『語文』32輯、昭和四十九年九月）
「語源探究の限界」（『言語生活』278、昭和四十九年十一月）
「汗をかく」（『境田教授喜寿記念論文集上代の文学と言語』前田書店、昭和四十九年十一月）
「日本語的な思考――受益態をめぐって」（『言語』四巻一号、昭和五十年一月）
「大野晋著『日本語をさかのぼる』」（書評）（『文学』四十三巻四号、昭和五十年四月）
「文献主義の立場――大野晋氏の述懐に関連して」（『文学』四十三巻十号、昭和五十年十月）
「日本人と文字との出会い」（『新・日本語講座4日本語の歴史』汐文社、

昭和五十年十一月）
「『あいきやう』と『あいぎやう』」（『国語科通信』30、昭和五十年十二月）
「『大鏡』の文章」（『鑑賞日本古典文学11大鏡・増鏡』角川書店、昭和五十一年一月）
「大鏡の『語り』」（『文学』四十四巻三号、昭和五十一年三月）
「『竹取物語・大和物語』」（解題）（天理図書館善本叢書29、八木書店、昭和五十一年七月）
「今昔物語」外（項目執筆）（『国民百科事典』平凡社、昭和五十一年十月）
「ルビの復権」（『図書』331、昭和五十二年三月）
「国語史の時代区分」（『講座国語史1国語史総論』大修館書店、昭和五十二年五月）
「語りの姿勢――「をり」の消長をめぐって」（『文学』四十五巻五号、昭和五十二年五月）
「『日本文法論』・『改撰標準日本文法（訂正版）』」（名著解題）（『言語』六巻五号、昭和五十二年五月）
「動詞の意義分析――ヰルとヲリとの場合」（『国語国文』四十六巻四号、昭和五十二年四月）
「国語学の戦後三十年」（『文学・語学』78、昭和五十二年六月）
「『時枝誠記博士論文集』（全三冊）・『同著作選』（全三巻）」（書評）（『国語と国文学』五十四巻十二号、昭和五十二年十二月）
「日本語の語源」（『岩波講座日本語12日本語の系統と歴史』岩波書店、昭和五十三年一月）
「ひるは雲とゐ」（『鑑賞日本古典文学1古事記』角川書店、昭和五十三年二月）
「山田俊雄著『辞書と日本語』」（書評）（東京新聞、昭和五十三年三月）
「岩淵悦太郎著『国語史論集』」（書評）（朝日ジャーナル、昭和五十三年四月）
「山田孝雄」（項目執筆）（『世界伝記大事典』ほるぷ社、昭和五十三年七月）
「『かなし』の意義」（『春日和男教授退官記念語文論叢』、昭和五十三年十月）
「かなづかい」外（項目執筆）（『国史大辞典』吉川弘文館、昭和五十四年～）
「日本語のルーツ」（講演）（『国語科通信』40、昭和五十四年二月）
「日本語の構造上の特色」（「ことば」シリーズ10『日本語の特色』文化庁、昭和五十四年三月）
「昔話の表現と言語」（『日本昔話大成12研究篇』角川書店、昭和五十四年十二月）
「ヂンヂロゲ流伝考」（学士会会報、昭和五十五年十一月）
「文学教育のありかた」（『日語学習与研究』3、昭和五十六年八月）
「ことばは死なず」（『言語生活』356、昭和五十六年八月）
「国語の表記と漢字」（文部時報、1254号、昭和五十六年十一月）
「海上（うなかみ）」（『萬葉』110、昭和五十七年六月）
「時代区分」（『講座日本語学1総論』明治書院、昭和五十七年六月）
「語源――『神』の語源を中心に」（『講座日本語の語彙1語彙原論』明治書院、昭和五十七年七月）
「中国での日本語」（『国文学』二十七巻十六号、昭和五十七年十二月）
「将来の日本語」（国語問題研究協議会研究集録、昭和五十七年十二月）
「和名抄」外（項目執筆）（『日本文学大辞典』岩波書店、昭和五十八年～昭和六十年）

「語彙史を目ざして――私の語彙論」（『日本語学』二巻五号、昭和五十八年五月）
「接頭語『うち』の消長」（『国語語彙史の研究四』和泉書院、昭和五十八年五月）
「古代人の心とことば」（『古代日本を考える4古代日本人の心と信仰』学生社、昭和五十八年十月）
「日本的知性と日本語――その論理性をめぐって」（『講座日本思想2知性』東京大学出版会、昭和五十八年十一月）
「ワキの意味――〈付〉ヲカシ・ヲコツリ・ワザヲキ」（『芸能史研究』84、昭和五十九年一月）
「池上禎造著『漢語研究の構想』」（書評）（『文学』五十三巻三号、昭和六十年三月）
「ヲカシの系譜」（国際日本文学研究集会会議録8、昭和六十年三月）
「ワキとヲカシについて」（『語源研究』7、昭和六十年四月）
「日本人の日本語」（『外から見た日本語・内から見た日本語』武蔵野書院、昭和六十年四月）
「『金田一春彦博士古稀記念論文集全3巻』」（書評）（『言語』十四巻五号、昭和六十年五月）
「歌ことばの一面」（『文学・語学』105、昭和六十年五月）
「中古語の位相」（『日本語学』四巻十一号、昭和六十年十一月）
「日本語コンプレックス」（『国語通信』282、昭和六十一年二月）
「接辞とは」（『日本語学』五巻三号、昭和六十一年三月）
「古代の日本語」（『古代語への招待II』大阪書籍、昭和六十一年三月）
「日本語と日本文化」（オルビス2・甲南女子大学、昭和六十一年四月）
「新村出先生とその学問」（『図書』451、昭和六十二年九月）
「物語に用いない語――歌語」（『国語語彙史の研究七』和泉書院、昭和六十一年十二月）
「接尾語『――グチ』の一考察」（『甲南国文』35、昭和六十三年三月）
「女性のワキはなぜないか」（『国立能楽堂』58、昭和六十三年六月）
「方言接辞の研究――接辞について（接尾語ガテラとグチ・ゴトの生成）」（『方言研究年報』30、昭和六十三年十月）
「惚れない読み方」（『国語教育』2、平成一年一月）
「漢字と仮名の機能」（『漢字講座4漢字と仮名』明治書院、平成一年二月）
「〈歳時閑談〉基球・底球・野球」（『文学』五十七巻八号、平成一年八月）
「恥をかく」（『本』十四巻十二号、平成一年十二月）
「古代日本語の内的再構」（II報告・討論9）（『日本語の形成』三省堂、平成二年三月）
「あいさつの言葉遣い」（「ことば」シリーズ32『言葉遣い』文化庁、平成二年三月）
「朝山信弥さんの人と学問」（『朝山信弥国語学論集』和泉書院、平成四年五月）
「山口佳紀著『古代日本文体史論考』」（書評）（『国語と国文学』七十巻十二号、平成五年十二月）

――龍谷大学教授――